アメリカ医療はいま：医療現場からのレポート、「医療経営情報」（ミクス書籍）、No.81、1995-06、PP.48-50

Doctrina
Theses & Articles

アメリカ医療はいま：医療現場からのレポート

第３回　HMO の、ある事情

木村　健

■ HMO 主治医の診断に疑問を持って……

ウイスコンシン州の太平原で農業を営む両親の間に生まれたバーバラ・ボーエンは、先天性食道閉鎖症と診断され、生後数時間で気管食道瘻を切り離し、離断した上下食道を吻合するという大手術を受けることになった。近くの大きな町にある病院で受けた 12 時間の手術は成功し、一週間も経つとミルクも十分に飲めるようになり、術後 10 日目に母親の腕に抱かれて広い農場の真ん中にある家に帰ることができた。

ところが、3 カ月目の離乳食が始まった頃から咳込むようになり、ときには息を止めてチアノーゼが出るようになった。症状はどんどん進行して、半年目には 1 カ月に 2、3 回は救急車で地域の病院の救急外来に運ばれ治療を受けるようになった。

病院では小児科のドクターがもっぱら診療にあたったが、食道造影の結果、胃内容が少し食道に逆流する所見が見られたので「胃食道逆流現象」という診断を下され、胃液の酸度を下げる薬を与える治療が行われた。

しかし、窒息発作は相変わらず週に 1、2 回も見られるようになり、9 カ月目には入院をして経過を観察することになった。入院後も、治療方針はもっぱら胃食道逆流現象に向けられたが、よくなる気配はなかった。ミルクを吐くことは 2 度もなかったのに、胃食道逆流現象という診断を下されたことには納得できないと思った父親は、人づてに聞いたアイオワ・シティの大学病院でバーバラを診てもらう決心をした。

バーバラの家族は、ウイスコンシン州にいくつかある HMO（後述）と呼ばれる健康保険のグループに加入しているので、州境を越えてアイオワ大学で診てもらうためには、HMO の許可がいるのである。もちろん、保険を利用しない覚悟があれば、面倒な手続きはいらないのだが、自責で賄う受診料が家計に響くことは必至である。HMO の指定外の病院または医師にかかる場合には、まず HMO の枠の中でかかっている主治医の同意を得ることが必要である。バーバラの父親は主治医の小児科医であるカリガン医師にかけあって、アイオワ大学で受診する同意を得た。しかし、これはあくまでも診断あるいは治療方針の決定に関してのみに限られていて、HMO 枠外の病院で手術などの治療を受ける場合には、改めて HMO 専属の専門医の同意がいるのである。

バーバラを診た私は、即座に気管軟化症の診断を下した。気管軟化症というのは、食道閉鎖症の子どもの 10%に合併する疾患で、気管を構成する馬蹄形の軟骨の硬度に欠陥があるため、呼吸運動によって気管が閉塞し、呼吸困難、チアノーゼを来す疾患である。まだ全米に数十台しかないダイナミック CT という大がかりな装置で調べてみると、バーバラの気管は呼気のたびにほとんど塞がってしまうことがわかった。

「あなたのお子さんには、大動脈胸骨固定術という手術が必要です。この手術が成功すると、窒息を起こして救急外来に運ばれることもなくなるでしょう」

「ぜひお願いします。バーバラが息を詰めるたびに、死ぬ思いがします。手術で治してくださるなら、これほど嬉しいことはありません。ドクターから主治医のカリガン先生に連絡していただけますでしょうか」

アメリカ医療はいま：医療現場からのレポート、「医療経営情報」（ミクス書籍）、No.81、1995-06、PP.48-50

「承知しました」

バーバラ一家が入院手術の手続きを終えて帰ったあと、カリガン医師に電話をした。新しい患者を診ると直ちに紹介医に電話をかけ、同時に手紙を口述するのが、アメリカでは医者の義務になっている。長い電話のあとで、ドクター・カリガンは、ようやく手術が必要であることに納得してくれた。

■ 4000 ドルの請求に対し 100 ドルカットの支払いが

気管軟化症という病気の概念も、その治療である大動脈胸骨固定術も、一般の小児科の教科書には載っていないことが多い。日本では、私がまだ神戸にいた 16 年前に、初めて施行した手術である。アイオワに移ってみると、周辺のネブラスカ、ミネソタ、イリノイを含めた中西部一帯では、まだ一般に広く知られた病気ではないため、新進気鋭の小児科医によって発見されたラッキーな子どもたちのみがアイオワ大学に紹介され、外科治療を受けている状態である。遠くはノースカロライナからも紹介状を持った患児が訪れ、つい先日手術をしたばかりである。

バーバラに話を戻そう。ドクター・カリガンと電話で話した翌日、バーバラ一家の加入している HMO 専属の小児外科医から電話があり、私と同業者のくせに手術には同意できないという。「私は長年小児外科医をしているのだが、気管軟化症で大動脈胸骨固定術が有効であったという話は聞いておりませんぞ。バーバラの呼吸障害の原因は胃食道逆流現象であって、気管軟化症ではないといまでも固く信じています」

この石頭な奴と思ったが、気を静めて「あなたが経験がないとおっしゃるのなら、私の書いた論文を含めた 20 幾つもある論文のコピーを送って差し上げます。私どものダイナミック CT で調べた結果は、明らかに気管軟化症です」

「どうしても手術をなさるといわれるのなら、わが HMO としては治療費の支払いに応じるわけにはいきませんぞ。HMO としては実験治療に支払う資金はございません」

電話は喧嘩別れに終わった。医療費の支払いができないという理由で治療を断わることは法律で禁じられているが、断わる気になれば理由を選ぶに不自由はない。カネがとれないとなれば、「手術の適応が間違っていました」くらいの理屈は平気で言ってのける医者はゴマンといるのである。だが、アイオワ大学に限っては、こうしたへ理屈は存在しない。だから、今日もアイオワ大学で小児外科医をしていられる。予定どおりやって来たバーバラに施した大動脈胸骨固定術は無事終わり、直後からバーバラの呼吸困難は永久に消えたのであった。手術 2 日目、嬉しさに顔を真っ赤に染めた両親に抱かれて、バーバラはウイスコンシンの大平原の家へと帰って行った。12 カ月後のチェックでも丸々と太ったバーバラには、何の異常もなく、手術前の救急外来が嘘のようであった。あの日、口論のあげく喧嘩別れをした小児外科医からは、以来何の音沙汰もない。

私の会計係はバーバラの HMO あてに 4000 ドルの手術料を請求した。返ってきた応答は、予期したとおりゼロであった。だが、これで引っ込んでいるわけにはいかぬ。先方の診断の間違い、当方の治療の正当性などを詳細に記述したレポートを先方に送り付け、「場合によっては医療訴訟になりかねませんぞ」と匂わせた結果、3900 ドルの支払いに合意を得ることができた。なせ 100 ドル値引かれたのか、いまもってわからない。

HMO（Health Maintenance Organization）というのは、地域、会社、団体などを対象とした健康保険組合である。日本の健保組合と異なるのは、この組織のなかに医師および病院などの医療機関が抱き

Doctrina
Theses & Articles

込まれていることである。

1992 年には全米で 564 組織、4400 万人が加入していたが、94 年には 5000 万人を突破した。その特徴は、月額 1 家族 350 ドル、個人だと 130 ドルの掛け金で、これまでの保険と違ってほとんどゼロに近い自己負担で治療を受けることができる点である。受益者にサービスを保障するためには、HMO は医師および病院をその組織のなかに抱え込んで安定した患者の供給を約束する代償として、HMO 患者に限っては入院料、手術料、材料費などを低額に、在院日数は短かく抑えるという契約を結んでいる。その結果、92 年には、HMO 傘下の病院の在院日数は 4.4 日であった。全米の平均と比べると約半分である。HMO は加入者が発病した際、医者にかかりやすいという利点のほか、予防医療すなわち加入者の健診などにも力を入れている。また、増加する一方の入院・手術料に待ったをかける働きもしている。

一方、傘下の医師、病院に患者を縛り付ける嫌いがある。患者は自分の意思で医師や病院を選ぶことが困難である。HMO の医者はバーバラのような患者を専門医に送りたがらない。バーバラの場合のように、傘下に抱える医師の経験あるいは知識に欠如がある場合、患者は自ら決断して専門医にかかるチャンスを失い、場合によっては生命を落とすことにもなりかねない。傘下の医師や病院に患者を囲い込んでしまった結果、ビジネスとしての経費は安くはあがったが、診療内容は " 安かろう悪かろう " という弊害がすでに見受けられつつある。

また、多くの HMO では見込みより多くの加人者があったため、巨額の余剰金がプールされ、HMO の役員のなかには年収が何百万ドル（ン億円）の健保長者も出るようになってきた。この件はワシントンの議会でも取り上げられ、委員全で対策が検討されているところである。

健康保険の問題では各国とも頭痛の種を抱えているが、特にアメリカでは、長年守られてきた自由診療の牙城が HMO によって根本から揺さぶられようとしている。しかし、患者の自由な判断を阻害する HMO を嫌ってか、アイオワ州では加入率はむしろ減少の傾向にある。自由を尊ぶアメリカンの国民性を考慮すると、日本の健康保険制度に似た HMO は、いくつかの修正を加えない限り、将来はないものと考えられている。

アイオワ大学教授（アイオワ大学付属病院小児外科部長）木村　健